

たように身につかないところがありましたので、この後にもまたしばしば是正して、漸次恰好のとれるものに仕立上げられて行きました。その仕立上げは、奈良朝からその以後の時代になつてようやくでき上つたと考えられるのであります。

次に飛鳥時代の美術工藝の方面について考えて見ることにいたします。先に述べました制度律令の上からして見ますと、飛鳥時代は大陸文化が輸入され、それを或る程度日本固有の文化と調和せしめようとする意圖のあつたことは認められますが、大體においては、なおよく國情に合うようには消化されていなかつたものと言わねばならぬと思います。美術工藝においても、同じようなことが言い得るのではないかと思われれます。當初は、唐なり半島から來朝した人々または歸化人の手によつて作られたものが大部分で、たとえ日本人の手が加わつておつたとしても、それを指圖し指導した人は、唐や半島の外國人とか歸化の人であつたらしく、日本人はその指圖をうけ、助手をつとめたにすぎなかつたと思われれます。それが日本人の手によつて作られるようになるまでには、技術の修得や材料關係等の上からして、かなりの時間を経たことと見なければなりません。漸くにして國人の手によつてこうした美術工藝品が作られるようになりましてからも、その初めは、全く唐や朝鮮の模倣にすぎないものであつたことは當然の次第でありまして、今日に残つているものの上からも、明瞭に認められるのであります。例えば、法隆寺の止利佛師作の釋迦三尊の像とか、同じく法隆寺の藥師如來の像などの如きでありまして、これらは誰にも認められるように、象徴的でまた硬直な感じの強いもので、北魏の様式をそのままに模倣したもので、まだ日本國民の情操を反映する優美の特徴などの寫し出されていないのであります。かかる有様は、制度文物が同じく模